

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・評価の観点、評価項目(取組内容)が整理され、取組(達成)の状況、改善の方策との連動が明確でわかりやすい。
・保護者と教職員のアンケート項目について整合性が図られており、的確な自己評価ができています。
・昨年度と比較すると、各項目において保護者の意識は低くなり、教職員の意識は高くなっているという傾向である。コロナ禍もあり、教育活動が直接見えにくいというのがその要因ではないかと推測する。その差を縮めるため、より教育活動の「見える化」と周知を図ってほしい。
・アンケート結果を見る限り、全項目ともABの合計は90%以上である。数値だけにとらわれず、少数でもC、Dがある項目や保護者の自由記述(マイナスの内容)等も考慮していく必要がある。児童生徒や教育活動の現状と照らし合わせながら、より実態に即した総体的な評価となるよう判断基準も含めて検討を進める必要がある。
・達成度の4段階評価について、どこまで取り組めたら達成なのか、達成の指標が保護者にとってはわかりにくい点が見られる。また日常のコミュニケーションから感じる学校への思いと評価が乖離している保護者の姿もある。より丁寧に教育活動とアンケート内容について理解を図ってほしい。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価

学校自己評価の8観点についての自己評価結果は概ね適切である。
・ホームページや学校通信「輝き」、小学部通信「のびっこ」、中学部通信「みちるべ」など、学校からの情報発信を通して、保護者や地域、関係機関との関係づくりは進んでいる。一方で昨年度と比較して、情報発信量や質も期待されている。近年の情報発信で求められる個人情報保護の観点を大切に発信していることを丁寧に説明していく必要がある。

・さらにコロナ禍での1年間、感染防止のための対策と教育活動の充実を両立させるための工夫や課題を保護者等と共有し、次年度以降につなげてほしい。
・働き方改革は、意識を変えて、わりきることも必要である。さらに業務量の精選や事務の効率化が図られるとよいと考える。
・すべてA評価であるが、成果と課題を具体的に整理し、今後も工夫や改善に取り組んでほしい。

(1)児童生徒理解

・保護者や関係機関と丁寧に連絡をとりあい、共通理解を大切にされた教育活動を進めた様子がうかがえる。C、D評価の保護者の意識をその背景も探りながら、丁寧に関係性を築いてほしい。
・児童生徒の実態をよりの確に把握し、改善の方策に示されているように、個別の指導計画の活用を期待する。
・児童生徒の混乱を招かぬよう、職員全体で共通理解するとともに、家庭でも同じ支援ができるよう、家庭との共通理解は特に気をつけてほしい。
・ふりかえりが重要である。教育活動一つ一つで個々の子どもたちが、どのような力をつけているのか、どのような姿をみせているのかを具体的に整理し、個別の教育支援計画、指導計画の作成や活用を保護者と共通理解しながら、引き続き進めてほしい。

(2)学習活動

・特別支援学校としてのICT活用についての取組を進め、自立や社会参加に向け、社会人となるまで切れ目のない支援につなげてほしい。
・指導者によって指導力や指導方法に個人差もあると推察する。児童生徒が不利益を被ることがないように、保護者が不安に思わぬよう、個々に合った活用方法の工夫等、組織的な指導力アップに向けた取組を期待する。
・より児童生徒の実態に即した「動作」「環境」「コミュニケーション」を観点とした指導改善への取組は素晴らしい。今後も計画的・継続的に指導改善に取り組んでほしい。
・インターネット環境がない家庭がどのくらいあるのか。配慮しつつ、様々な試行錯誤を期待する。

(3)道徳、人権教育

・他人事が自分事変わったときに理解が進む。保護者や地域も巻き込みながらの道徳、人権教育を期待する。
・保護者も一緒になって道徳・人権教育に触れる場が増やしてほしい。
・三木市は、みんなに「やさしい街」みんなが「住みやすい街」への取組を早くから進めてきた。それが北播磨全域に広がってきた経緯がある。人権教育を受けてきた世代は理解が進んでいる。今後も、行政や保護者、関係機関とも連携、協力しながらの啓発が大切である。
・人権感覚を培うには、人と人とのふれあいに尽きる。コロナ禍ではあるが、原点にかえって、足元の日常生活並びにふれあいの場づくりに尽力してほしい。

(4)交流及び共同学習

・交流がなかった時代、周囲の理解を得るには、たいへんな努力が必要だった。ここに〇〇という子がいて一緒に大人になっていくということを知ってもらうということが大事である。故に地域校交流や居住地校交流は本当に大切である。
・目的を明確にし、共有したうえで、丁寧な打ち合わせを行い、実施してほしい。あわせて、より相手校の理解、周知を図る働きかけを実施し続けてほしい。

(5)学校行事

・新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながらの取組が昨年度よりも工夫され実施できたことは素晴らしい。児童生徒の特性に配慮し、その良さが発揮できた学習発表会であった。実施は大変だったと思うが、児童生徒もマスクをつける習慣等、新しい生活様式を身につけることにもつながっている。小・中学部ともに教職員によるオリジナル作品で、子どもたち一人ひとりの特性が生かされたキャストイングやストーリーにっており、どの子も自分の力を精一杯発揮できていた。
・フェスティバルを無観客実施のみでなく、11月に再度、保護者対象に実施していただきありがたかった。やはりオンラインでは伝わらないものがあるように思う。
・次年度のフェスティバルでは、ふれあいバザーの実施等は難しいかもしれないが、屋外で保護者と子どもたちが一緒に競技できるかたちで実施できると嬉しい。参観だけでなく、一緒に参加したい保護者も多いと思う。
・行事を小さくしてしまうのは惜しいので、新たな形での計画実施を期待する。

(6)家庭・地域との連携 地域における特別支援教育のセンター的な機能の発揮

・一般社会は厳しく「あいさつ」「返事」「暴力はダメ」「順番を守る」等の最低限のルール理解等ができないと居場所がなくなるし、対応してもらえなくなる。交流は、そういう力をつける場にもなっている。保護者とも協力して、子どもたちに、社会へでていくための力をつけてほしい。
・そのためにはパニックにならない配慮や共通理解が欠かせない。「偏食」への対応等小学校時代からできることがたくさんあるので、保護者とともに積み重ねてほしい。
・保護者どうしのつながりも大切である。ふりかえると先輩のお母さん、お父さんに学べる場は、たいへんありがたかった。コロナ禍でもありSNSを通してつながりの場づくりに努めているが、福祉サービスの充実等の社会情勢や保護者の意識の変化やコロナ禍のため、なかなか広がらない。書面でのやりとりが増えるのは仕方ないが、感染対策を十分に行ったうえで保護者同士が対面で話ができる場づくりに尽力してほしい。
・高等部を卒業したあと(学校教育が終わったあと)大海原に放り出された気分を味わった。将来も見えないと思ひ込んでしまった。そうならないよう、地域に根ざした活動も求められている。
・地域における特別支援教育のセンター的な機能の発揮の方法を、さらに試行錯誤、工夫してほしい。
・地域の人たちと共同で何かを行うことが難しい中、工夫して取り組んでいる。フェスティバル等の行事が復活できれば連携も取りやすくなる。
・家庭との情報共有の方法や内容を再確認、工夫し、これまでの方法に拘らず、その手段も含め柔軟な対応をのぞむ。

(7)健康・安全指導

・新型コロナウイルス感染症だけでなく、通常でも健康管理、安全に配慮しなければならないことが多いが、一つ一つ丁寧に取り組んでいる。
・設備面でも改善され、よい教育環境になっていっていることは、児童生徒、家族、教職員等、みんなにとって意義がある。
・コロナ禍にあって、緊急時も多様化している。万が一の時に、児童生徒が取り残されることがないように、普段から想定して準備をすることが大切である。
・自治体やPTAと緊急時を想定し、「いざというときどうするのか」「何か方法はあるのか」等の協議を進めてほしい。
・コロナ禍における避難、誘導訓練や実際の場面を想定した緊急時の救急救命訓練の継続をのぞむ。多様な場面を想定し、緊急時の避難や誘導を安全に行えるよう、切実感のある実践的な研修や訓練の充実を期待する。

(8)施設管理・教育環境整備

・保護者、教職員ともに、安全で安心できる教育環境を整えることに努めている。
・コロナ禍での様々な感染防止対策、学校施設面へのすばやい対応などが教育環境整備につながる。またコロナ禍ではあるが、地域の方との協力、支援などを得ての人的教育環境整備も含めて、今後も、児童生徒の実態に即した、きめ細かで心温まる教育環境の整備を模索してほしい。